



地域ねこプラン：ねこの飼い方3原則

屋内飼育 身元の表示 不妊去勢

ねこの生態・習性・生理・本能と感染症

ねこの習性には、本能に従うハンター行動などがあります。生まれながらの生態を知ること、飼い主の愛情といわれます。

本能や習性・生態生理そのままに、自由な外出が許されると、テリトリーや獲物を求めます。また交通事故に遭う危険や、感染症や病気にかかる機会も増えるほか、妊娠し妊娠させます。

東京都で年間2万4千匹(1日当り65匹)も交通事故死で処理された報告があります。

各国のねこエイズ感染率は、スイス1%以下、北米1.5%、ニュージーランド9%、日本とイタリア12%前後で、ねこの数に比例することも文献に記されています。

飼いねこは室内でも十分幸せに生活できますから、健康のために安全快適な室内環境を飼い主が与えられます。室内トイレは病気などの異常を見つけやすくし、苦情トップの「フン・尿」問題の解決になります。

本能に根ざした欲求をかなえることで、ねこの生活は快適になります。ハンター行動の欲求に、おもちゃで遊ぶ工夫や、登りたがる欲求に、上下運動が出来るような工夫、爪研ぎ器も必需品です。飼い主の居住環境を考えながら、工夫することができます。

ねこの生態を知りながら、一頭(ひとりっ子)ではない環境を与えることで、より健康で快適に過ごせるともいわれます。室内飼いの飼い主さんは、細心の注意と努力を怠りません。野良ねこをお家に連れ込ませること、ペットのねこの室内飼育は違います。(主務所管を知る・餌やり禁止とは?などは、別項目)



イラストレーション© 梶原美穂

東京都の1998年の調査で、飼われているねこの約半数が外出自由、首輪を着けているのはその半数、飼い主の連絡先を着けているねこが1割にも満たないと報告されています。

室内飼いで万が一に備え、飼い主の責任として誰にでもわかるような「身元の表示」がすすめられています。

ねこは成長して発情期になると、オシッコで臭い付けをしたり、メスは大きな鳴き声をあげるため、本能に根ざした欲求をやわらげる不妊去勢手術をうけさせます。

手術は、発情期特有の生理行動をなくすだけでなく、発情の強い欲求からくる精神的・肉体的なストレスや苦痛を減らします。メスの子宮蓄膿症や乳腺腫瘍、オスの精巣や睾丸の腫瘍、前立腺肥大などの病気予防にもなり、肉体的な負担が減ることから、そのほかの疾病を防げるともいわれます。

性成熟期の問題行動を体験すると、手術後もそれらの行動の見られることがあり、早めの適切な時期に手術を行います。

一生涯、他のねこに接触させない繁殖制限の方法も思い付きますが、近くのオスやメスに性成熟の想いを秘めて、辛い日々を過ごし続けるかも知れません。

飼い主が手術を怠り、うっかり妊娠させてしまっても、生まれたすべてのねこを生涯の伴侶と同じ愛情で飼い続ける覚悟がないのなら繁殖制限をします。(動物愛護管理法は、別項目)

愛護動物所管行政は原則として、うっかり生ませたねこの引取り申請を、「法令順守の行政サービスではない」としています。(引き取り申請は、別項目)

外出自由飼いのオスは妊娠させ、メスは妊娠します。

接触による感染症などの防止対策に、野良ねこから病気をもらう危険性が一般的にいわれますが、ねこの感染症を長期間検証した獣医学術書には、その逆も記述されています。(感染症は、別項目)

飼いねこに潜伏している感染症を「よそのコ」にうつしてしまっても、よそに子供をつくっても、その真相を知る人もいません。





地域ねこプラン：ねこの繁殖力

外のねこと、環境保全と、まちづくり。

2001年の「全国動物行政アンケート結果報告書(平成11年度)」によると、約28万匹の犬と、約27万匹のねこが致死処分(安楽死)され、約12億円も費やされました。

主に所有者や占有者からの申請で、センターなどの引取った数字は報告されますが、駆除や処分のため、どこかに見捨てられた頭数は分かりません。報告される数を上回る命が、人知れず長い時間をかけて、苦しみがらなくなるのでしょうか。

犬もねこも、1回の出産に複数の子を産みます。オスメス2匹のねこが年に2度、5匹の子を産み、その子が同じように5匹ずつ産み続けると、数字上は5年で976万5625匹です。

ねこの生きる現実の環境は、計算上の数字ほど恵まれていません。飼いねこの平均寿命は年々伸び続けて12歳以上とされていますが、外のねこは3年から長くても5年程度といわれます。

古い時代から世界中の野良ねこから見つかった、危険の少ないといわれる感染症は1つだけだったとされます。

現代の数十種類の感染症のほとんどの新種発見事例は、愛玩用ねこの繁殖キャテリーだったことが文献にも記されており、外に見捨てられたねこにも感染の危険が異常に高くなりました。(近交劣化、雑種強勢は、別項目。)

外のねこは飛ぶ鳥に赤ちゃんを持ち去られ、エイズやほかのウイルス感染症に冒され、交通事故に会い、致死処分され、人に傷つけ殺され、何かの目的で捕獲されるなどのほかに、過酷な運命を繰り返し続けています。

よく聞く言葉に「ねこが増える、餌を与えるな」というものがありますが、ねこの繁殖力は想像以上に強いので、たとえ乏しい食べ物環境に置かれる運命をたどっても、苦しみながら子孫を残します。

多くの人々は外のねこに、どのような感情をもっているのでしょうか?かわいそうと思う人、にがにがしく思う人、双方の言い分が、ご近所付き合いを悪くします。

国の愛護動物所管が実施した調査では、外ねこへの餌やりをどう考えるか?について、「ねこが増えるので与えない方がよい」37%、「ねこが集まり、フン尿などで生活環境が汚損するので与えないほうがいい」22.8%の方々が否定的でした。

「餌を与える人がフン尿の後始末をするなど、責任をもって管理するのであれば構わない」も29.6%で、外ねこの問題は環境衛生の保全問題であることをあらわしています。

今の日本はペット過剰時代に入っているともいわれます。ねこの強い繁殖力だけが原因ではなく、人の手で外に放されたねこが、身近で大きな社会環境問題にさらされます。

生活環境保全の社会問題を、ねこを愛し慈しみかわいそうと思う人と、にがにがしく、快く思われない人、双方の立場から考え解決する方法が考えられました。

地域ねこプランは、同じ街で暮らす住民同士がお互いに意識を持ち合い、同じ目的を目指したまちづくりに取り組む、官民協働プログラムという考えからスタートします。

